刑事長殉職

デカチョウ

姉小路祐

Yū Anekōji

講談社
NOVEL

刑事長　殉職

一九九四年四月五日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに表示してあります

著者―姉小路祐　© 1994 YU ANEKOJI Printed in Japan

発行者―野間佐和子

発行所―株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二―〇一　編集部〇三―五三九五―三五〇六
販売部〇三―五三九五―三六二六
製作部〇三―五三九五―三六一五

印刷所―豊国印刷株式会社　製本所―株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-181752-3（文三）

刑事長殉職

デカチョウ

姉小路祐

Yū Anekōji

講談社
NOVEL

ISBN4-06-181752-3

C0293 P780E (0)

刑事長 殉職

姉小路 祐

定価780円(本体757円)

クレジットカード偽造やニセ札作製、外国人露天商の元締めなど、活動を拡げるアジアマフィアを摘発する端緒を、若手刑事川喜多良一(かわきたりょういち)が摑んだ。〝春団治(はるだんじ)刑事長〟岩切鍛治(いわきりたんじ)を尊敬する彼は、社会的影響の重大さを怖れる府警上層部をよそに単独調査を開始した。職務遂行と在職死。警察小説最大のテーマに挑む最新作。

刑事長（デカチョウ）殉職

小路 祐

KODANSHA NOVELS

講談社ノベルス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ブックデザイン＝熊谷博人
カバーデザイン＝辰巳四郎

目次

第一章　ジューンブライド――7
第二章　もう一人のお立ち台ギャル――58
第三章　岩切の執念――99
第四章　殺したのは、おれだ――121
第五章　焼死した男――138
第六章　暗黒の抗争――172
第七章　奇岩城への登攀（とうはん）――208

第一章　ジューンブライド

1

（きょう一日、こいつが鳴りませんように）

川喜多良一は、ベルトに付けたポケットベルをポンと叩きながら、地下鉄・四天王寺前駅の昇降口を上がった。いくら非番の日でも、ポケットベルが鳴れば、すぐに署に連絡しなくてはならないのが刑事稼業だ。たいていの場合は非常召集で、たちまちその日の予定はオジャンになってしまう。

ちょっと買い物に行くとか、仲間と飲みに行くという予定なら潰れても仕方がない気がするが、きょうのようなフィアンセと一緒に式場に最終的な打ち合わせに行くという場合は、中断はしてほしくない。相手の鳥居理香は別の署の婦警であり、彼女と非番の日をタイアップさせるだけでも結構大変なのだ。

しばらくして川喜多の眼の前に、四階建ての小さなマンションが見えた。あと一ヵ月ほどで、川喜多はこのマンションに移り住むことになる。けっして新しくはなくエレベーターも付いていないが、交通の便がいいのが利点だ。西へ三百メートルほど行けば地下鉄の谷町線の四天王寺前駅があるし、東へ四百メートルほどで地下鉄堺筋線の恵美須町駅に行ける。理香の勤めている御堂筋署へは、ミニバイクで十分ちょっとだし、川喜多の配属されている愛隣署へも、自転車でも二十分とかからない。

理香はそれまで住んでいた独身寮をこの三月末に出た。年度途中に退寮するよりも三月にしたほう

が、入寮できる後輩が一人増えるという配慮をしたためである。そして、今のマンションに先乗りする形で住んでいる。六月の結婚式が済めば、二人のスイートホームになるのだ。

五月のさわやかな風を頬に受けながら川喜多はマンションを見上げた。入り口の集合郵便受けに、川喜多良一・理香という連記ができる日まで、あと五十日ほどだ。

マンションには管理人はおらず、最新のセキュリティもないが、彼女は婦警だから川喜多はそれほど心配はしていない。

三階まで一気に駆け上がり、チャイムを二回続けて鳴らす。これが二人の間のサインになっている。

「時間ちょうどね」

理香はピンクのワンピース姿でドアを開けた。

贔屓目だと言われるかもしれないが、結婚式を控えたここ最近になって理香はまたちょっと美しくなったと思う。

「川喜多良一巡査、お迎えに上がりました」

川喜多はおどけて敬礼をした。

「よろしい。同行を許可する」

理香は、屈託なく笑った。

二人の仲人をしてくれるのは、岩切鍛治巡査部長である。岩切は、府警本部の捜査一課に勤めるベテラン刑事だ。何物をも恐れぬ行動的な捜査ぶりとナニワ節的な人情溢れる性格から、「春団治刑事長」の異名を取っている。

川喜多は、岩切を師と仰ぎ、尊敬している。二代目春団治と言われるのが何よりも嬉しい。

「わしの女房はもう死んでしもておらへんけど、それでよかったら若い二人の門出の手伝いを喜んでさせてもらうで」

岩切は、媒酌人役を快諾してくれた。岩切の娘の

サユリが高校生ながら、媒酌人夫人の代役をしてくれることになっている。

「式場に行く前に、ちょっと寄っておきたいところがあるのよ。きのう、日本橋の電気屋さんで、かわいい引き出物を見つけたの」

引き出物を何にするかはまだ決めていない。衣裳合わせや招待状の発送もこれからだ。川喜多が思っていた以上に、結婚をするということは手間と暇のかかる儀式を経なくてはならないようだ。

「じゃあ、そこへ先に寄ろう」

大阪一の電気商店街である日本橋までは、歩いても数分の近さだ。

二人は肩を並べて西へ歩いた。すぐに行政区は天王寺区から浪速区になる。日本橋の電気店から少し北に進めば、難波になる。俗にミナミと呼ばれる地域だ。キタと呼ばれる梅田周辺に比べて、庶民的で、値段が安くて、風俗関係の店も多いのが特徴だと川喜多は思っている。東京にたとえれば、キタは丸の内や銀座、そしてミナミは新宿に雰囲気が似ているような気がする。

九州生まれの川喜多は、ツンと澄ましたところが全くなくて、誰でもすぐ受け入れる懐の深さを持ったミナミが好きである。

「川喜多さん。きのう帰ったのは結構遅かったのね。八時ごろに電話したけど、出なかったわ」

「ごめん」

川喜多の住んでいるマンションはJR新今宮駅から自転車で約五分の浪速区戎本町で、理香のところとは約一キロ離れており、ちょうど中間に日本橋の電気店街が位置することになる。

「きのうは聞き込みに行っていて、遅くなってしまった」

川喜多は、西成区を舞台にした中古車輸出シンジケートの捜査にあたっている。中古のトラックや乗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

用車を解体し、部品やタイヤに分解して輸出するケースが最近増えている。日本製の部品は質が良く、タイヤなどはツルツルになるまで使えて最後はゴム草履にして再利用できるので、東南アジアなどで人気があるようだ。

パキスタンやバングラディシュなどアジアの国から何人かが日本にやってきて、日本人エージェントの助けを借りて中古車輸出に組織的に携わっている。部品や古タイヤを産業廃棄物の形で日本国外に出すためにわざと部品を汚したり、タイヤに穴を開けることもしているようである。

そして、少しでも新しいものを手に入れたいと、路上駐車している車を盗む者まで現われた。川喜多たちは、その盗難グループを捜査している。

「あそこよ」

理香は、堺筋に出る少し手前で人差し指を出した。大阪随一の電気街は、メインの堺筋のほか、こうした脇道にも数多くの店が軒先を並べている。

〝友屋電化ショップ〟と描かれた看板の揚がるこぢんまりとした店が、理香の指先にあった。敷地二十坪ほどの木造二階建ては、一階部分が店舗になっている。あるいは二階部分は居宅かもしれない。

〝お祝い品用の電化製品専門店〟とガラス戸にレタリングされた文字が書かれてある。こうした小さい店は、特徴を出さなくては大規模店には勝てないということだろう。理香と川喜多は、中に入った。狭いが、明るくて雰囲気のいい店だ。BGMが耳障りにならない音量で静かに流れているのもいい。

棚に並んでいる商品の多くには、〝祝〟の文字が入れられている。新婚の二人用炊飯器とか、小型洗濯機、さらには赤ちゃん用の子守歌オルゴールといったものが揃えてある。色は、赤やピンクといった暖色系がほとんどだ。

「これが気に入っているの」

理香はハンディクリーナーを手にした。淡いピンク地に可憐なカスミ草が描かれている。そして〝送り主の名前を金文字で入れます〟という札が付いている。

「結婚式に来てくれた人たちに、良一ａｎｄ理香って入れて贈ったら記念になると思うの」

「そりゃあいいな」

見本としてハンディクリーナーに入れられている文字は、しゃれたデザインのレタリングでとても感じがいい。

「いらっしゃいませ」

五十歳ぐらいの男が笑顔で近づいてきた。「ご結婚でございますか」

「ええ、まあ」

「よろしいですね。この店をやっていて何よりも嬉しいのは、お慶びの手伝いができることです。わたくし、店主の友田と申します」

「これは、一台おいくらなのですか？」

理香は値段のことが気になっているようだ。

「一台五千五百円ですが、引き出物として数を買っていただければ、値引きをさせていただきます」

「四十人分ぐらい揃えたいのですけど」

「それじゃあ、一台四千円でいかがですか？　文字入れ手数料も含めての値段です」

「嬉しいわ。ついでに消費税をサービスしていただけるともっと嬉しいんですけど」

理香は、落ち着いた口調で値切った。もうすでに、すっかり主婦になっている。

「かしこまりました」

友田は笑って了解した。「十日間ほどいただきましたなら、文字入れは出来上がります。恐れ入りますが、こちらにお二人の住所と電話番号をご記入ください」

友田は伝票を取り出した。

さっそく商談成立である。
「こちらの店は、結婚を控えた人が多いんですか」
手持ちぶさたな川喜多は友田に訊いた。
「そうでございます」
「買う品物を決めるのは、新婦の方が多いですか」
「ええ、圧倒的に女性がイニシアチブをお取りになります」
九州男児の川喜多は、亭主関白が理想だった。しかし、すでに挙式前から、その構図は崩れている。
(まあ、これもご時勢さ)
川喜多は少し無理をして自分を納得させているこのごろだ。
友田に見送られてこぢんまりとした〝友屋電化ショップ〟を出ると、その横に位置する有名チェーン店の〝エビス電気堂〟の社屋が大きく眼に映る。ここから堺筋までの、広い敷地に建っている。
「ウッソー、シンジラレナ〜イ」
堺筋から見て一ブロック奥、つまり〝友屋電化ショップ〟のすぐ隣になる〝エビス電気堂〟の事務室から、甲高(かんだか)い女性の声が聞こえてきた。五月の陽気に窓が開けられているので、甲高い声は道路まで丸聞こえだ。
「アタシ、そんなパソコンなんていくつも買うわけないわよ〜」
髪の毛を茶色に染めたミニスカートの女性がキンキンした声で、中年の男性店員に抗議している。服装やメイクは派手だが、顔だちはまちがいなく美人の部類に入る。
「そうおっしゃられても、手前どもの伝票にはっきり記録が残っておりますので」
中年の店員は、ギャルの迫力に押されている。
「伝票と、アタシの言っていることと、どっちを信用するのよォ」

その女性は請求書を手にしている。「機械だってうっかり請求書を出してしまうことだってあるでしょ」
「まずそんなことはございませんが」
「だって、こんなことありっこないわよぉ。パソコンなんてどうやって動かすのか何もわかんないんだから」
しばらく二人のやり取りを見ていた川喜多は、間に割って入るかどうか、少し迷った。警察には民事不介入の原則がある。しかし、犯罪が絡んでいる場合は別だ。
「お話し中のところ、すみません」
川喜多は、声をかけた。「もしかして、クレジットカードの支払いのことで、もめてらっしゃるのでしょうか」
二人は、突然の闖入者に、申し合わせたように驚いた顔を向けた。
「川喜多という者です。今そこを通りかかったのですが、少し思い当たるフシがあるので、声をかけようと考えました」
川喜多は、宝塚ジェンヌなみの濃いマスカラを付けたギャルの方を向いた。「あなたは、身に覚えのない請求書が来たので、びっくりしたということですね」
「ええ。だってよく読んでみたら、アタシがパソコンを三台も買ったことになってんのよ」
スモーキーグリーンのシルクブラウスにオレンジのミニスカートのギャルは、どう見てもメカに強いタイプではなさそうだ。
「ちょっとすみません」
川喜多は素早く請求書を手に取った。小泉絵里奈というのが彼女の名前だった。確かに単価十二万七千三百円の同じタイプのパソコンが三台購入されている。

「あなたは、最近海外旅行をしませんでしたか？」
「香港へ行ったわ。先月」
「そのときクレジットカードを使用しませんでしたか」
「向こうのブティックで使ったわよ、でも」
小泉絵里奈は、請求書を奪い返すように取った。
「どうしてそんなに根掘り葉掘り訊くのよォ」
「愛隣署刑事課の川喜多といいます」
きょうは非番なので、あいにく警察手帳は持っていない。「あなたのクレジットカードは偽造された可能性があります。香港などには、マフィアの絡んだ偽造団が暗躍しています。もう少し詳しく話を訊きたいのですが」
ポケットベルが鳴らないのに、川喜多は自分から仕事に嵌まっていた。
川喜多が現在捜査をしている中古車シンジケートは、クレジットカード偽造団と根で繋がっていることがわかってきていた。ここで具体的な資料が得られれば、もしかしたら手掛かりの一つになるかもしれない。
「余計なお世話よ」
小泉絵里奈は、真紅のルージュを引いた唇を歪めた。「アタシは、ここのお店に文句を言いに来ただけで、ケイサツの厄介になろうなんて思ってないんだからァ」
「そう言わずに協力してくれませんか」
「面倒なことが大キライなのよっ」
「でも、あなたは被害を受けたんでしょう」
「いいのよ。また稼げばいいんだから」
彼女は手にした請求書をゴールドチェーンのショルダーバッグにねじ込んで、川喜多の横をさっと擦り抜け、スタスタと歩き出した。
川喜多は溜息混じりに、遠ざかる派手なショッキングピンクのメッシュ・シューズを見つめた。

「すみません。今のようなクレームは、何度かありますか？」
川喜多は店員の方を向き直った。
「うちでは初めてです。でも、同業他店では、類似のトラブルがあったと小耳に挟んでいます」
店員は困った顔をした。「お客様がいくら『身に覚えがない』と言われましても、クレジットカードでパソコンが購入されているのは事実です。あのお客様が本当に使われたかどうかはわかりかねますが」
川喜多は、一応店員から事実関係を聴取しておくことにした。理香は黙ってバッグからメモ帳を差し出してくれた。
「ごめん、二十分ほど時間を食っちゃったね」
「いいのよ。別に急いでいるわけじゃないし」
地下鉄・恵美須町駅に向かって歩きながら、理香はほほえんだ。「こと仕事になるとすっかり顔つきまで変わって、あたしは放っとかれるみたいね」
「悪い。君に了解も得ずに」
「いいのよ。それ覚悟で、刑事の妻になるんだから」
理香は、媒酌人の岩切から言われていたことがあった。
「刑事というもんは、因果な稼業やで。たとえ自分や自分の家族を犠牲にしてでも、見ず知らずの他人のために危険を冒して命懸けで職務を遂行せなあかんときがある。張り込みで毎日帰って来んこともしょっちゅうや。それでいて、金銭的報酬は恵まれへん。せやけど、これほど男らしい仕事は他にあらへん。そこんとこ、わかったってや」
理香は、川喜多のいないところでそう話してくれた岩切に感謝をしている。
「さっきのクレジットカードの偽造のことだけど、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com